

MfG_J_Ryoukan_Flood_and_Sanjoh_Earthquake (C) 春日正利

1. 良寛の「災難に逢う時節には」について 良寛と三条地震

2. 良寛の、本当に言いたい気持ちは 火宅無常の世界

3. 徳昌寺境内良寛詩歌碑(漢詩 和歌) 香積山中有佛事

4. 洪水、寛政甲子夏

補足 災難に逢う時節には災難に逢うがよく候 詳細

補足 良寛禅師の山田杜皐宛て書簡 詳細

補足 道元の「同事」と「仏説無量寿経」の中の「先意承問」

補足 苦しみと悟り ～ 三法印と四聖諦(ししょうたい)

(1) 苦の原因と消滅 (仏法の見方)

(2) 苦を乗り越える方法 (仏法の見方)

補足 手まりの哀しく辛い話

補足 三条地震の震央について
最近の研究より

1. 良寛の「災難に逢う時節には」について

文政11年(1828)11月12日、後に「三条の大震」と呼ばれる大地震が発生し。多くの被害が現在の三条市を中心に起こりました。

この時、良寛さんは71才、和島の木村家に仮寓していました。良寛さんは三条の地震の惨状を人づてに聞き、心配でたまらず三条まで行き、その被害の悲惨さに強い衝撃を受け、いくつかの詩歌を残しています。

三条の市にいでて

「長らえん ことや思いし かくばかり 変わりはてぬる 世とは知らずて」
 「かにかくに 止まらぬものは 涙なり 人の見る目も 忍ぶばかりに」

そして、表題の、地震で子供を亡くした山田杜臯(とこう)(*1)への見舞状が書かれるのですが、あまりに辛い文です。

「地震は信(まこと)に大変に候。

野僧草庵は何事もなく、親類中死人もなくめでたく存じ候。

うちつけに、死なば死なずに永らえて、かかる憂きめを見るがわびしさ
 災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。

死ぬ時節には死ぬがよく候。

是ハ災難をのがるゝ妙法にて候。」

いろいろな見方がされており、良寛を嫌いになる人もいます。

実は、かつて私も、“良寛さんともあろう人が……。ここは、どうなのかな”、と思っていました。しかし、この見舞状が、不幸の渦中の杜臯から、良寛さんの無事を案じた見舞い(*2)の手紙への返事であるを知り、見方が変わりました。中ほどの歌は、生き長らえたために、こういうひどい目を見るのが辛いという気持ちだと思います。杜臯とは、日頃から何でも話せる友だったことから、仏様の話もしていたでしょう。そういったことから、私は、手紙の全体の理解としては、『仏様に、おまかせしましょう』というような、いつもの、やさしい口調のことばで、伝わる手紙ではなかったか、と思うのです。

光華女子学園・宗教部 ホームページには、『子供を亡くし悲嘆にくれる友人に対し、そのことに一切触れることなく、「人として生まれたからには生老病死からは逃れることはできず、あるがままを受け入れ、その時自分ができることを一生懸命やるしかない」という仏教の教えを語ることで励ました、心のこもった言葉ではないでしょうか。』と、ありました。

<https://gakuen.koka.ac.jp/archives/677>)

私も、そのように感じたいと思いました。

(*1)

和泉屋山田家は、与板(長岡市)の町年寄で、酒造業を営んでいた。良寛と親交が深かったのは、九代太郎兵衛重翰(しげもと)。俳諧や絵を愛した。杜臯(とこう)は号。山田杜臯は、良寛より16歳年少。天保15年(1844)、71歳で死去。

(*2)

<https://www.zen-essay.com/entry/sainan>

良寛和尚の父親が生まれた与板という町がある。ここには良寛と親しい間柄にある知人が何人もいたが、とりわけ酒造業を営んで山田杜臯は良寛和尚を「蛭」とあだ名でよぶほどの仲の良い間柄であった。三条地震が発生したとき、杜臯が暮らす与板もやはり甚大な被害に見舞われた。

しかも悲しいことに、杜臯はこの地震で子どもを亡くしてしまった。しかし杜臯は、そうした自分たちの被害もさることながら、同じく被害に遭ったであろう良寛が無事であるかを心配に思い、良寛に見舞いの手紙を送った。手紙を受け取った良寛は、幸いにも無事だった。そこで自分が無事であることを伝えるため、すぐに杜臯へ返信の手紙を送るのだが、その末尾に添えられたのが、この「災難に遭う時節には……」の言葉なのである。地震に遭った杜臯の境遇を憐れみ、自分は無事であることを伝え、そして歌を一首したためた。

人生を生きながらえてきてしまったことで、人々が悲しみに打ちひしがれる姿も多く目にすることとなった。やるせない思いでいる。

そんな意味合いだろうか。

そしてこのあとに件くだんの言葉が続く。

「しかし災難に遭う時節には災難に遭うがよく候

死ぬ時節には死ぬがよく候

是はこれ災難をのがるる妙法にて候

かしこ 良寛」

親鸞聖人の話をまとめたとされる歎異抄の中に、「火宅無常の世界」という言葉があります。

仏法の根底の考え方を示す言葉ですが、私は、この文の中に、「空」、「諸行無常」の意味も表わしているのではないかと、思っています。

良寛さんの気持ちと「火宅無常の世界」について、二章でお話し、

道元、親鸞の教えの類似、「空」、「諸行無常」などについては、

道元の「同事」と「仏説無量寿経」の中の「先意承問」、

苦しみと悟り ～ 三法印と四聖諦(ししょうたい)について、

補足にまとめました。

2. 良寛の、本当に言いたい気持ちは ～火宅無常の世界

親鸞聖人の話をまとめたと言われる歎異抄の中に、「火宅無常(かたくむじょう)の世界」という言葉があります。

煩惱具足(ぼんのうぐそく)の凡夫(ぼんぷ)、火宅無常の世界は、
万のこと皆もって、空事・たわごと・真実あること無きに、
ただ念仏のみぞまことにておわします

(三行目は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、)

燃えさかる炎の中のような諸行無常の世にあって、信じるに足るものは何か。親鸞聖人は、真実の幸福は、阿弥陀如来の本願に救い摂られる以外にはありえない、「ただ念仏のみぞまことにて在します」と言い切ります。

同じことを、はるか昔の聖徳太子は、「世間虚仮、唯仏是真(世間は虚仮なり、唯仏のみこれ真なり)」と言われたそうです。太子の死後、妃が太子追悼のために、天寿国繡帳のなかに綴った文章の中にあつたとのこと。聖徳太子の言葉として、奈良中宮寺の宝物として伝えられました。

さらに、親鸞様の250年あとの蓮如上人は、皆さんも耳にしたことがあると思いますが、『白骨の章』の御文章で「朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり」と言われました。

この世には変化の大きい少ない、その時期の違いはあっても、変化しないものは何一つなく、私たちの命も、最後は、この身体さえ焼いてゆかねばならないのです、仏様におまかせするしかないのです、と。

洪水や火災などがいつ私たちを襲うか分からない。一寸先は闇であり、このような世界で生きているのが私たちの姿ではないか。

みな、同じことを申されているように思います。

心を許せる杜皐さんと日常的に、このような話をしていた良寛さんにとって、慰めの手紙の本音も、この辺にあるように思うのですが、如何でしょうか。

たまたま、浄土真宗で知られる言葉で説明させてもらいましたが、曹洞宗でも、また他の宗派でも、恐らく同じような言葉があると思います。

良寛さんの、もともとの立脚点は曹洞宗・道元の教えですが、念仏も信仰していたと云われています。むしろ宗派を超越した僧だったと考えます。晩年の良寛さまの境涯は、阿弥陀如来の本願念仏を心から喜んでおられ、阿弥陀仏を詠んだ歌の代表的なものに、下記もあります。

- ・草の庵に寝てもさめても申すこと南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
- ・不思議の弥陀の誓いのなかりせば何をこの世の思い出にせむ

2. 徳昌寺境内良寛詩歌碑(漢詩 和歌) 香積山中有佛事

<https://ryoukan.anjintei.jp/r-1520223-2011.html>

碑面 恭聴於香積精舎行 無縁供養遥有此作
此有文政十一戊 子冬十一月十二日地振後

香積山中有佛事 預選良晨建刹竿
受風寶鐸丁東鳴 交文幢幡参差懸
梵音哀雅鉦磬起 古殿窈窕梅檀熏
僧侶森々霜雪潔 往来綿々群蟻牽
顰蹙法雲覆瓦甍 繽紛雨華翻山川
賛歎聲融連底冰 歎喜心回艷陽天
昨夜有人与板帰 只道今日結良縁
借問法會主是誰 都此供養(辨)侯門
吾聞是語仍歎息 誠哉當時愷悌君
淨辨供養請僧衆 今日好日好因縁
無礙法力渡苦界 多少亡靈生諸天

毛々難可乃伊佐々 牟羅当氣夷散々面能
韋佐々閑能己数美都久幾能阿東

沙門良寛恭書

讀下し

恭しく 香積精舎に於て無縁供養を行ふと聴き 遥かに此の作有り
これは文政11戊子冬 11月12日地振(震)後にあり

香積山中仏事あり 預め良晨を選びて刹竿を建つ
風を受けて寶鐸丁東として鳴り 交文の幢幡 参差として懸る
梵音哀雅 鉦磬起り 古殿窈窕として梅檀熏ず
僧侶森々として霜雪潔く 往来綿々として群蟻牽く
顰蹙たる法雲 瓦甍を覆ひ 繽紛たる雨華 山川に翻る

賛歎の声は融りて底氷に連り 歎喜の心は回す艷陽の天
 昨夜人あり与板より帰る 只道ふ 今日良縁を結ぶと
 借問す 法会の主は是れ誰ぞと 此の供養侯門より(弁ず)と
 吾 是の語を聞き仍りて歎息す 誠なる哉 当時愷悌の君
 淨く供養を弁じて僧衆に請ふ 今日好日 好因縁
 無礙の法力は苦界を渡し 多少の亡霊諸天に生ぜん

ももなかの いささむらたけ いささめの

いささかのこす みづくきのあと

沙門良寛恭書

案内板のメモ

文政11年(1828年) 11月12日 突如として三条を中心とする大地震が起こった
 この時の被害は 死者1600余人 傷者2500余人と伝えられ 希有の大惨事
 であった

良寛さまの草庵は無事であったが 友情にあつい良寛さまは 各地の友人知己に
 それぞれ見舞状を出されて慰めたり励ましたりされた

もっとも親しい友人 与板の山田杜阜にあてた書簡の末尾には

災難に逢う時節には災難に逢うがよく候

死ぬ時節には死ぬがよく候。是ハ災難をのがるゝ妙法にて候

との有名な言葉が書き添えられている

徳昌寺では翌文政12年春 地震の犠牲となった無縁佛を供養するために
 大法要を厳修したが 良寛さまはその盛大であったこと 又 その費用が全部
 与板藩主井伊侯の寄進によったものであることを聞き 非常に感激して
 この詩と歌を作られたものである

1952/7/1

香積山 徳昌寺

場所

MfG_J_Ryokan_Flood_and_Sanjoh_Earthquake 恭聴於香積精舎行

新潟県長岡市与板町与板乙6025

(曹洞宗)香積山徳昌寺境内筆者良寛建

碑昭和27年(1952)7月(徳昌寺住職大機和尚100回忌記念として)

建碑者与板町有志

参考「定本良寛全集」1-648 2-1315

「いしぶみ良寛」正-56-200_203

香積山徳昌寺(こうしゃくさんとかしやうじ)は、曹洞宗の寺院です。、
文明11(1479)年直江家を開基、耕陰道夫(こういんどうふ)を開山として
創始以来上杉家の帰依を受け、直江家の菩提寺として栄えました。
上杉家・直江家の会津移封、米沢移封以後、米沢に一度移転しますが、
直江家が兼続、お船の死後断絶したこともあり、寛永年間頃徳昌寺は与板
に戻りました。

与板に戻ってからは牧野家・井伊家藩主の崇敬と檀信徒、特に豪商大阪
屋三輪家の擁護により、開山以来初代住職から連綿し、本日に至ってい
ます。

文政11(1828)年、有栖川宮家の祈願所となり、寺院の至る所に菊の御紋
章が見られます。また、良寛の父の実家が与板にあったことから良寛はよく
与板を訪ねており、ここ徳昌寺には良寛と交友があった三輪左一や維馨尼
の墓があります。

3. 洪水、寛政甲子夏

信濃川洪水に苦しめられた中越の中でも、とりわけ与板、三条は、洪水に苦しめられました。洪水の悲惨さについて、「寛政甲子夏」として、多くの人に知られている長句を読んでいます。作物の出来が良く、人々が秋の穫入れを待っていたところ、突然に悲劇に見舞われた様子がわかります。良寛は、村人が子供を手放す悲惨さも、目の当たりにしており、いたたまれなさに苦しんでいました。

寛政甲子(かつし)の夏

寛政十二年(1800) 夏の水害の惨さを、その冬に詠んだか

凄凄芒種後 玄雲鬱不披
疾雷振竟夜 暴風終日吹
洪潦襄階除 豊注湮田菑
里無童謡声 路無車馬帰

凄凄(せいせい)たる芒種(ぼうしゆ)の後
玄雲鬱(うつ)として 披(ひら)かず
疾雷(しつらい)竟(ひつきよう) 夜に振ひ
暴風終日吹く
洪潦(こうろう)階除に襄(のぼ)り
豊注 田菑(でんし)を湮(しず)む
里に童謡の声無く 路に車馬の帰く無し

江流何滔滔 回首失臨沂
凡民無小大 作役日以疲

江流 何ぞ滔滔(とうとう)たる
首(こうべ)を回(めぐら)せば 臨沂(りんき)を失す
凡そ民は小大無く
役を作(な)して日に以て疲る

畛界知焉在 堤塘竟難支
小婦投杼走 老農倚鋤睢

畛界(しんかい) 焉(いづく)に在るを知らず
堤塘 竟(つひ)に支へ難し
小婦 杼(ひ)を投じて走り
老農鋤に倚りて睢(のぞ)む
何れの幣帛(へいはく)か 備へざる

何幣帛不備 何神祇不祈
昊天杳難問 造物聊可疑
孰能乘四載 令此民有依
側聽野人話 今年黍稷滋

何れの神祇(しんぎ)か 祈らざる
昊天杳(こうてんよう)として 問ひ難く
造物 聊(いささ)か疑ふべし
孰(たれ)か能く 四載に乗じて
此の民をして 依る有らしむる
側らに野人(やじん)の話すを聴けば
今年は黍稷(しよくしよく)滋(しげ)れり

人工倍居常 寒暖得其時
深耕兮疾耘 晨往夕願之
一朝払地耗 如之何無罹

人工は居常(きよじよう)に倍(ばい)し
寒暖 其の時を得たり
深く耕し 疾く耘(くさぎ)り
晨(あした)に往き 夕べに之を顧みたり
一朝 地を払ひて耗(むな)し
之を如何ぞ 罹(うれ)ひ無からんと

現代文

<http://blog.livedoor.jp/tatsuoh2006/archives/65972514.html>

水かさは徐々にまして あふれた水は田畑をおおう
 村には子どもの唄もなく 車馬の往き来も絶え果てた
 江流何ぞ滔滔たる 首を回せば 臨沂を失す
 凡そ民小大と無く 役作日に以て疲る
 川はどうしてこんなに水が多いのだ 見ると土手は大きく削られている
 子どもも大人もおしなべて 何をやるにも疲れている
 畛界焉くに在るを知らず 堤塘竟に支へ難し
 小婦桴を投じて走り 老農鋤に倚りて歎く
 畦はどこにあるかも分からない 堤はどうにも支えられない
 娘たちは慌てて機を下り 老農は鋤に寄りかかって嘆く
 何れの幣帛か備へざる 何れの神祇か祈らざる
 昊天杳として問ひ難く 物聊か疑ふべし
 どうして幣を供えないのか 天地の神に祈らないのか
 天は遙かで問えないのだ 神も仏もないものか
 孰か能く四載に乗じて 此の民をして依る有らしめん
 側らに野人の話すを聴けば 今年は黍稷滋れりと
 誰か、禹王のように四載に乗って この民を支えることができないのか
 道ばたで農民の声を聞くと 今年も豊作まちがいない
 作付けはいつもの倍で いい天候に恵まれている
 深く耕し草取りをして 朝から晩まで働いた。
 一朝地を払ひて耗し 之を如何ぞ罹ひ無からんと
 ある朝すべてを失った どうして悲しまないでいられよう

補足 災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。
 死ぬ時節には死ぬがよく候。
 是ハ災難をのがるゝ妙法にて候。

<https://gakuen.koka.ac.jp/archives/677>

光華女子学園・宗教部ホームページ

子供を亡くした山田杜臯(とこう)に送った見舞い状にこの一文が出てきます。
 見舞い状では
 「地震は信(まこと)に大変に候。
 野(や)僧(そう)草庵は何事もなく、親類中死人もなくめでたく存じ候。
 うちつけに、死なば死なずに永らえて、かかる憂きめを見るがわびしさ」
 と生き長らえたために、こういうひどい目を見るのが辛いという気持ちを示した
 冒頭の言葉が出てきます。

災難に逢うときは災難に遭い、死ぬときには死ぬしかない。私たちがどんなに
 手を尽くしてもそれは変えられません。だとしたら、それらを受け入れて生きる
 しかないという意味の言葉です。
 どんなに不運が続き、大災害に逢おうとも、それは紛れもない命の現実の姿
 でしかなく、そのことを「災難」としてしか捉えることができないならば、
 どこまでも、その不運を嘆いて生きて行くしかありません。

子供を亡くし悲嘆にくれる友人に対しそのことに一切触れることなく、
 「人として生まれたからには生老病死からは逃れることはできず、
 あるがままを受け入れ、その時自分ができることを一生懸命やるしかない」と
 いう仏教の教えを語ることで励ました、心のこもった言葉ではないでしょうか。
 そこには良寛さんの温かい人間味が感じられます。
 この良寛さんの手紙は、恐らく山田杜臯にとってどんな慰めの言葉よりも
 救いとなったのではないのでしょうか。(宗)

一章、及び 注(*1) に示したもの以外に、下記もある。

<https://www.zen-essay.com/entry/sainan>

この言葉を読んで、「なんて冷たい言葉だ」と感じた人はきっと少なくないと思う。おそらくは「人間、誰だって災難に遭うもんだ」と、なんだか突き放すような、「しょうがない」「どうしようもない」という雰囲気という言葉に読み取れてしまうからだろう。そりゃ間違っただけは言っていないけど、正しいことを言えばいいってもんでもないでしょ、と、デリカシーに欠ける言葉だと感じる人もいるかもしれない

正直なところ、実際に災害に遭った方々にこの言葉を伝えるのは難しいと思う。「災難に遭えばいい」と聞こえてしまう言葉は、たとえそこにどのような意図が含まれているにせよ、相手を傷つける可能性を有してしまっていると考えたほうがいい。

すでに信頼関係が構築されている間柄だとか、言葉を理解してもらえる土壌が整備された状態であれば伝わるかもしれないが、そうでなければ軽はずみに口にするべき言葉ではないように思う。

ただそれでも、もし自分が災害に遭ったときには、きっとこの良寛和尚の言葉を杖にして生きるのではないかと私は思っている。

万人に受け入れられる言葉ではないかもしれないが、少なくとも私はこの言葉を酷だとは思わない。

人が抱く「苦」という感情の真実を言っているからだ。

災難から逃れるための真実、災難に苦悩しない真実、厭うことで苦悩が生じるといふ、苦悩の真実を示した言葉であるからだ。

災難が災難になるとき

災難が降りかかるときは、降りかかるしかない。

死が免れないのなら、死を受け入れるしかない。

そうした現実を認めたくない、受け入れたくないと思い、現実を「厭う」という感情から、人の苦悩ははじまる。

それが仏教における「苦」の理解の第一歩である。

災難を受け入れたくないと思うことで、「地震」は「災難」と認識される。
 災難を受け入れることで、地震は「災難」から「地震」へと本来の姿に戻る。
 たとえ地震から逃れる方法がないとしても、災難から逃れる方法はあるのだ。
 良寛和尚が言うように、災難に遭うときは災難に遭う。
 すでに災難に遭ってしまっているのに、遭いたくないと思ってしまうことで苦悩が生じるのなら、遭ってしまった災難を受け入れよう。
 災難とは、それを災難と受け取ったときに生じるものであって、地震を災難と認識しなければ地震は災難にはなりえない。

だから、災害によって家を「壊された」と恨むのではなく、
 災害によって「壊れた」と、ただありのままに受け取ろうというのが良寛和尚の
 言いたい姿勢なのではないか。
 良寛和尚の言う「災難から逃れる妙法」とは、天の事柄である「地震」を、人の
 事柄である「災難」にしない認識方法なのだと私は思う。
 一読すると冷たいように感じられる言葉かもしれないが、なにも良寛和尚は
 後世に残そうとか、万人に伝えようなどと思って手紙にこの言葉を書いた
 のではない。相手が杜臯だから書いたのだ。
 言葉の真意を理解してもらえる間柄であるとの信頼関係があったからこそ
 その言葉なのだと受け取るべきではないか。

時に「デリカシーに欠けた手紙のやりとり」と批判されることさえある言葉であるが
 こうしたやりとりができる2人の間柄を、私はほとんど羨ましいとさえ思う。

補足 良寛禅師の山田杜皐宛て書簡 詳細

<http://sybrma.sakura.ne.jp/312ryoukan.tegami.html>

地しんは信に大變に候 野僧草庵ハ何事なく親るい中死人もなくめで度存候
うちつけにしなばしなずてながらへてかゝるうきめを見るがはびしさ

しかし災難に逢時節には災難に逢がよく候 死ぬ時節には死ぬがよく候
是ハこれ災難をのがるゝ妙法にて候 かしこ

良 寛

(注) 1. 上記の山田杜皐宛て書簡本文は、『定本 良寛全集 第三巻』書簡集/ 法華転・法華讃(内山知也・谷川敏朗・松本市壽 編集、中央公論新社・2007年3月20日初版発行 2008年10月30日4版発行)によりました。この書簡の通し番号は、217となっています(同書315頁)。

2. 上記書簡の本文は常用漢字・総ルビになっており、句読点が施されていますが、ここでは旧漢字に改め、句読点・ルビを省略してあります。「わびしさ」が「はびしさ」となっているのは、原文のままです。

また、宛名になっている部分と手紙本文の間に、引用者が「…… ……」を入れたことをお断りしておきます。

3. 『定本 良寛全集 第三巻』の内容解説によって、少し注をつけておきます。

ここにある「地しん」は、文政11年(1828)戊子11月12日、栄町(新潟県三条市)を中心に起きた地震で、与板の被害は全壊家屋264軒、焼失家屋18軒、死者34人、負傷者118人、死馬7頭の、かなり大きな地震だったそうです。しかし、良寛の住んでいる島崎(長岡市)は、1軒の全壊家屋もなかった由です。

「臘八」は、臘月八日のことで、十二月八日。

読みについて。「信に」は、まことに。「めで度存候」は、めでたく・ぞんじそうろう。「逢時節」は、あう・じせつ。「杜皐老」は、とこう・ろう。

4. 手紙の宛先人の山田杜皐(とこう)は、与板(新潟県長岡市)の町年寄で、酒造業を営んでいた山田家9代太郎兵衛重翰(しげもと)。俳諧や絵を愛した。杜皐は号。天保15年(1844)1月16日、71歳で死去。良寛より16歳年少。(全集、304頁)

5. 良寛はこの書簡と同じ日に、同一の歌を記した書簡(通し番号47)を阿倍定珍(さだよし)に送っています。

先日大地震世間一同の大變に候 野僧草庵ハ何事もなく候
うちつけにしなばしなずてながらへてかゝるうきめをみるがわびしさ
來春寛々御めにつけ申上度候 かしこ

良 寛

臘八

.....

定珍老

良 寛

(「寛々」は、ゆるゆる。)

和泉屋山田家跡

場所 良寛と親交のあった山田杜臯邸跡(和泉屋山田家跡)は
新潟県長市与板町与板508-23「畑仁新聞店」の
向って左隣の駐車場(大石駐車場)辺り
山田屋河渡跡は 別院橋西詰信号西南角



補足 道元の「同事」と「仏説無量寿経」の中の「先意承問」

道元と親鸞は、たびたび自力と他力の典型として、対比される。簡単に論ずることはできない問いであるが、目指す究極は同じと捉える人も多い。良寛には、道元の『正法眼蔵』の中の「愛語、同事」も、親鸞の説いた「仏説無量寿経」の中の「和顔愛語、先意承問、小欲知足」があるように思う。以下に掲げた「愛語」、和顔愛語、先意承問、小欲知足のころは、良寛の要所であり、人間社会のなかで、人として生きるうえで大切なことを良寛さんは身をもって示したと感じています。

(1) 親鸞、道元の菩薩の行の根本

他力、自力の別はなく、
最後は仏様の力である。

言葉は違っても
底辺は同じではないか。

「先意承問」

相手の心をおもんばかり
相手の気持ちに
なってみる
尽くしあう、支えあう気持ち

道元		親鸞
菩薩の行としての四摂法		法蔵菩薩の行
愛語	利行	和顔愛語
同事		先意承問
布施		小欲知足
(利行)		志願無倦
<p>他力も自力も、根は共通である。 自力の反対は「他力」ではなく、「怠慢」である。 他力は、「まかせよで」ある。</p> <p>(C) 春日正利</p>		

菩薩の行としての四摂法

「布施」 幸せを一人占めせず、精神的にも物質的にも広くあまねく施し、
与えられていることを感謝して生きる。

「愛語」 どんな人に対しても、その人の事を第一に考え、その人のため
になる言葉をかける。

「利行」 見返りをもとめない利他の行い。自分のことは勘定に入れず、
他の幸福のためによき手だてを廻らす。

「同事」 自分を捨てて相手と同じ心・境遇になって、仏心を働かせる。
相手のことを思い、相手と同じ立場に身をおき、行動を共にする。

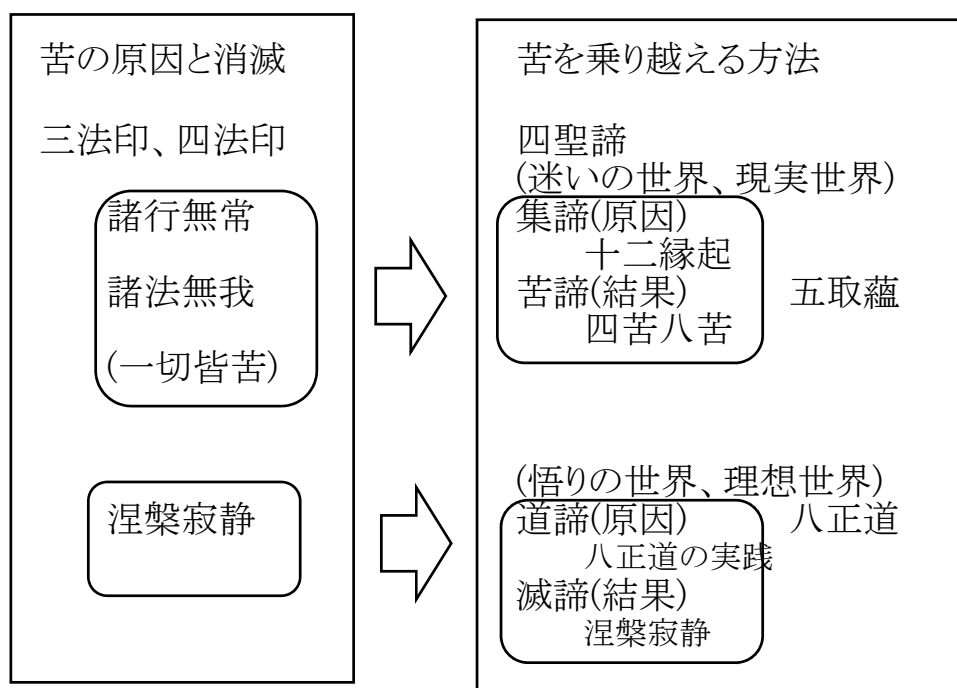
補足 苦しみと悟り ～ 三法印と四聖諦(ししょうたい)

(1) 苦の原因と消滅 (仏法の見方)

三法印とは、「諸行無常印」「諸法無我印」「涅槃寂靜印」の三つを言います。「印」とは、印章(しるし)という意味です。

この三法印に「一切皆苦」を含めて四法印(しほういん)とする場合もあります。「四聖諦」(ししょうたい)は「四諦」とも言われるもので、「諦」とは、真理という意味ですので、4つの聖なる真理のことです。

下図は、初期仏教から不変の、苦と解脱の関係性を示しています。



仏教の出発点は、「一切皆苦(人生は思い通りにならない)」と知ることから始まる。なぜ苦しみが生まれるのでしょうか。仏教ではこの原因を、「諸行無常(すべてはうつり変わるもの)」で、「諸法無我(すべては繋がりの中で変化している)」という真理にあると考える。これらを正しく理解したうえで、世の中を捉えることができれば、あらゆる現象に一喜一憂することなく心が安定した状態になる。つまり、苦しみから解放される、とお釈迦さまは説いている。これが、目指すべき「涅槃寂靜(仏になるために仏教が目指す“さとり”)」。

まさに、サフラン酒の離れの一室にかかる、新井石禅師の詩
 人生を夢と観すれば 悲しみもなく 苦しみもなし
 萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ
 の世界です。

(2) 苦と、それを乗り越える方法（仏法の見方）

十二縁起

過去・現在・未来の三世輪廻(りんね)を12の項目で説く。

無明(むみょう)・行(ぎょう)・識・名色(みょうしき)・六処(六入)・触(そく)・受・愛・取・有・生・老死の12をいう。 原始仏教よりあった思想である。

四苦八苦

人間のあらゆる苦しみの称。四苦は生苦、老苦、病苦、死苦。八苦は四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦の四つを加えたもの。

五取蘊

仏教で人間存在を構成する要素の色(しき、肉体)・受(じゅ、感覚)・想(そう、想いめぐらす)・行(ぎょう、行なう)・識(しき、本質を捉える)、または人間存在を把握する色・受・想・行・識の五つの方法をいう。蘊とは集まり、同類のものの集積を意味する。

煩惱(ぼんのう)に伴われた五蘊を五取蘊(ごしゅうん)または五受陰(ごじゅおん)という。私たち自身、煩惱を意味する言葉。

般若心経の照見五蘊皆空

五蘊(ごうん)は皆(みな)、空(くう)なりと照見(しょうけん)してと、ある。この後に、有名に「色即是空、空即是色」が続く。

八正道

「真理に合った・調和のとれた」という考え方・見方・行動を示しており、自分本位ではなく、大きな立場から物事を判断しなさいという教えである。

- ・正見・・・自己中心的な見方ではなく、中道の見方をすること。
- ・正思・・・真理に照らし合わせ物事を考えること。
- ・正語・・・真理にあった言葉を使うこと。
- ・正行・・・仏の戒めにかなった行いをする事。
- ・正命・・・正しい職業で得たお金で生活すること。
- ・正精進・・・自分に与えられた使命や目的に対して正しく励むこと。
- ・正念・・・真理に向いた正しい心を持つこと。
- ・正定・・・真理に照らし、正しい状態で心を定めること。

涅槃寂静

煩惱の炎の吹き消された悟りの世界(涅槃)、静やかな安らぎの境地(寂静)。諸行無常、諸法無我を積極的に活用し、コントロールし、真理に合致した完全な調和と安らぎの状態といえる。

補足 手まりの哀しく辛い話

かつて長岡市中之島で開催された歴史資料展示会を拝観し、良寛さんの、こどもらとの手まりに関するメモ文を詠みまして、このような背景もあったかと、始めて知りました。

成書では、長岡の吉岡二郎氏による「島崎における良寛」(文芸社2010)にも、ありますが、このころ、県内では、飢饉、干ばつ、水害などの天災が毎年のように起こり、農民は食うや食わずの生活だったようで、子供を男の子、女の子によらず人買いに売ることもあったようです。

その悲劇は、例えば木崎宿の色地蔵などにも記録されているようで、現在の群馬県大田市木崎にある、旧例幣使街道の宿場町木崎宿には、幕末の全盛期には29軒もの旅籠があり180人以上の飯盛り女がいて街道最大の宿場町だったとのことでした。

飯盛り女たちは 越後の出雲崎や寺泊出身の娘が多く 幼少期には良寛さまと鞠つき唄など歌って遊んでいた娘も含まれていたようです。・・・という辛い話です。

補足 三条地震の震央について

当初、死者数の分布が、三条が最多で、次が与板という状況などから、三条地震の震央は、現在の新潟県三条市芹山付近と推定されていた。しかし、近年、当時の諸藩の記録文書による家屋損壊状況の分布の分析から、見附周辺、東山断層の北端(見附断層)とされるようになった。見附駅の東へ三キロの位置に大平森林公園があり、東山麓になる。

----- 最近の研究から

三条地震による被害分布と震源域の再検討

歴史地震_2006

震源域は三条市内ではなく、さらに南方の見附市・旧中之島町(長岡市)であると考えらるべきであろう。椿沢村ほか6か村の建物被害率は極めて高いが、これらの村の東方のすぐ近くの栃尾町の被害率はそれほどではない。

強震動が集中したため被害が集中した震源域は見附市の東山丘陵地域であった。また2004年の新潟県中越地震の震源域は東山丘陵の南部であり、見附市域の東山丘陵と隣接したセグメントで発生したものである。

1828年の地震の震源域を東山丘陵地域とすることは、176年を隔てて隣接するセグメントで地震活動が起こったことを示唆しており、これらの地震活動の履歴を検討するうえで非常に重要な指摘となる。

----- 見附、三条で新たに活断層確認

国土地理院 専門家「震源にならず」

2020/11/13

国土地理院は12日、新潟県見附市と同三条市の市街地を含む計7区間で活断層を新たに確認したと発表し、これらを含む最新の活断層図を公開した。それぞれの活断層の長さは1キロ未満～約5キロ。中でも見附市内で確認された

活断層は研究者による過去の調査でも指摘されておらず、今回「見附断層」と命名された。地質の専門家は「いずれも地震の震源になるような断層ではない」と指摘している。

今回の活断層は、国土地理院が地震予測や防災対策の目的で毎年行っている調査で判明した。上空から撮影した写真を基に地形を判読する手法のため、活動周期や最後にいつ動いたかなどは「不明」(国土地理院)だという。

見附断層は4区間からなり、見附市西部で東西に並ぶ。

三条市から見附市にかけて南北に並ぶ別の3区間は、以前から存在が知られていた「吉野屋断層」と位置付けられた。一部の断層近くには、市役所やJRの駅もある。県内の活断層に詳しい新潟大のト部厚志教授は、今回確認された活断層について「1828年に三条地震を起こしたような(別の)断層が動いたときの変形が地表に現れた痕跡ではないか」と分析。これらが地震を起こすことはないとする。「ただ、地震で揺れやすい地域ではあるので、防災意識は持ってほしい」と話した。